茨城県笠間市

駒切遺跡発掘調査

報　告　書

平成18年5月

笠間市駒切遺跡発掘調査会

茨城県笠間市

駒切遺跡発掘調査

報　告　書

平成18年5月

笠間市駒切遺跡発掘調査会

序

駒切遺跡は、笠間市池野辺の東端で、水戸市有賀や杉崎に通じる市道0101号線北側の緩斜面の旧牧草地です。道を挟んで南側は水戸市大平で、笠間と水戸の行政界にあたり、ここに大縄林業原木株式会社の事務所があり、遺跡所在地の笠間に工場があります。

この工場は、21世紀の循環型社会作りに木材資源を無駄なく利用するため廃材等をリサイクルする工場です。この事業は、国をあげて提唱されている３Ｒ運動で、「リデュース（発生抑制）」「リユース（再使用）」「リサイクル（資源化）」の一翼を担う工場で環境保全、ひいては地球全体を救うため年々増大する事業に応えて工場の拡充が社会からも求められています。そこで大縄林業原木株式会社は、工場拡張にあたって関係法令を遵守し、文化財保護法においても遺跡である埋蔵文化財の有無とその取扱いの照会にあたり、率先して確認調査に協力されました。さらに遺跡所在が明らかになってからは市教育委員会と十分協議され、自然と文化財保護の立場に立って遺跡の保存状態が良いと判断された標高の高い地帯（4,500㎡）を緑地として現状保存されることになりました。しかし、工場としての機能上、構内道路だけは記録保存の処置を取らざるを得ないことから、これに対しても多大な協力を頂いたことに当調査会といたしまして敬意と感謝を表する次第です。

調査の結果、ここには縄文時代中期の集落地の一部で、住居跡１棟と５基の土坑、さらに古墳時代早期の住居跡１棟と溝１条が検出され、多くの縄文土器片と原始の息吹が感じ取れる完形品や復元できた縄文土器がいくつも出土しました。

また、発掘調査による原始古代の解明は、池野辺地内では初めてのことで、聞くところによると公民館活動の一つ「歴史を語る会」の方々をはじめ、この地域の方々が現地を訪れ、興味深く調査の状況を観察され、文化財に対する意識高揚と保存の意義を改めて認識され、更に遺跡台帳に記載されていない遺跡所在地の情報の提供や収集遺物の史料的価値等埋蔵文化財への関心が喚起されてきているとのことで、文化財保護とあわせて郷土愛の助成に寄与されていることにこの調査の意義の深さを感じております。

今後は、この調査報告書が更なる郷土の姿を理解する一助となることを期待いたしますと共に、調査にあたられました関係者の方々や、絶大なるご協力をいただきました大縄林業株式会社及びご指導をいただきました県教育庁文化課に衷心より感謝申し上げ序文といたします。

平成18年５月

駒切遺跡発掘調査会長
笠間市教育委員会教育長
菅　谷　輝　夫

例　　言

1．本書は、平成18年3月に実施した大縄林業原木株式会社の木材チップ工場拡張工事に伴う記録保存のための駒切遺跡発掘調査報告書である。

2．調査のため、笠間市教育委員会は、駒切遺跡発掘調査会を設けて実施した。

3．発掘調査会の組織は下記のとおりである。

会　長	菅谷　輝夫	（笠間市教育委員会教育長）
副会長	石塚　光男	（笠間市文化財保護審議会会長）
〃	塩田　満夫	（笠間市教育委員会教育次長）
理　事	天津　忠興	（笠間市文化財保護審議会副会長）
〃	小室　　昭	（笠間市文化財保護審議会委員）
〃	能島　清光	（笠間市文化財保護審議会委員）（調査主任）
〃	矢口　圭二	（笠間市文化財保護審議会委員）
〃	安見　珠子	（笠間市文化財保護審議会委員）
〃	岡井　俊博	（笠間市教育委員会生涯学習課課長）
監　事	小松崎　洋治	（笠間市教育委員会生涯学習課課長補佐）
幹　事	海老原　和彦	（笠間市教育委員会生涯学習課係長）
〃	海老澤　　仁	（笠間市教育委員会生涯学習課主等）

平成18年3月　市町合併に伴う人事異動によって発足当時の副会長保坂悦男、理事中田明、監事中野裕二の諸氏が交代した。

4．調査団は下記のとおりである。

調査主任　能島清光

調査員　山口憲一

調査補助員　横井義夫、正木信行、斉藤幸一、渡辺幸友、大図孝一、高橋きみ江、田辺伸子、菊池芳子

5．本書の作成は、製図、遺物の観察及び考察は、山口調査員が、土器の復元、実測、作図は、高橋きみ江、田辺伸子、菊池芳子が行い、その他は能島清光が担当した。

6．調査にあたり、調査指導は、県教育庁文化課の飯島一生文化財保護主事、指導委員の萩原義照（桜川市文化財審議委員）、鮮洞和彦（元教育財団主任調査員兼班長）より賜り、大縄林業原木株式会社に、整理作業では、笠間市歴史民俗資料館藤井協氏、茅原松幸氏に特段の御協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

凡　　例

1　遺構・土層・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構	住居跡－ＳＩ	溝跡－ＳＤ	土坑－ＳＫ
遺物	土器－Ｐ	拓本土器－ＴＰ	石器・石製品－Ｑ

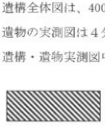
2　土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

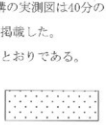
3　遺構・遺物実測図の掲載方法については、次のとおりである。

⑴　遺構全体図は、400分の１、各遺構の実測図は40分の１と80分の１に縮尺して掲載した。

⑵　遺物の実測図は４分の１の縮尺で掲載した。

⑶　遺構・遺物実測図中の表示は次のとおりである。


焼土


赤彩

● 土器・石製品　　- - - - - - 硬化面

4　遺物観察表の作成方法については、次のとおりである。

⑴　計測値の（　　）内の数値は既存値を、〔　　〕内の数値は推定値を示した。法量についてはcm、重量についてはｇで示した。

5　「主軸」は竈を持つ竪穴住居跡については竈を通る軸線とし、他の遺構については長軸（径）を主軸とみなした。「主軸・長軸方向」は主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
第１章　試掘による確認調査 …… 1
　第１節　遺跡の位置と環境 …… 1
　第２節　調査に至る経緯 …… 2
　第３節　調査の実施 …… 2
　第４節　調査結果と考察 …… 3
　第５節　埋蔵文化財の取扱いについての協議 …… 6

第２章　発掘調査の経過 …… 9

第３章　調査の成果 …… 13
　第１節　遺跡の概要 …… 13
　第２節　遺構と遺物 …… 13
　　１　縄文時代の遺構と遺物 …… 13
　　(1)　竪穴住居跡 …… 13
　　(2)　土坑 …… 15
　　２　古墳時代の遺構と遺物 …… 21
　　(1)　竪穴住居跡 …… 21
　　３　その他の遺構と遺物 …… 23
　　(1)　溝跡 …… 23
　　(2)　遺構外出土遺物 …… 25
　第３節　総括 …… 27
写真図版
報告書抄録

第１章　試掘による確認調査

第１節　遺跡の位置と環境

駒切遺跡は、笠間市池野辺字駒切630外で、池野辺の字宿を中心とする集落からは離れた地点で南東の桜川沿いの谷津田を越えた山林の上にあたり、水戸市の有賀台地の標高30mほどの頂点に近い。市道0101号線が水戸市との境界で、南が水戸市、北が笠間市でその緩斜面が遺跡である。この有賀台地の東は、池野辺の神宿る神奈備形の山朝房山を源とする桜川、西は武具池からの小川河に挟まれた舌状台地で、原始・古代の遺跡が点在することで知られている。

駒切遺跡の近くでは、東に駒来古墳群や奈良・平安時代の駒来遺跡、標高の下がる地に有賀台古墳群、一破塚古墳、縄文から土師・須恵器の複合する有賀台遺跡が点在する。また、南には大平古墳群が、その下にコロニー古墳群と縄文時代から古墳時代の権現山遺跡等があり、上方に位置する駒切遺跡はこの延長にあたり、遺跡台帳には№１縄文中期と土師・須恵器片の包蔵地、№３駒切古墳群は埋滅とある。ともに現在の大鋸木材原木株式会社の工場敷地内に位置している。工場敷地の北西は緩斜面で牧草地と山林、北から東側は雑木林、下は桜川沿いに谷津田が拓かれ、この台地上に遺跡の広がりは十分推定できる。

古老の話によると、平垣地は江戸時代から明治時代にかけて草刈場で、駒切・駒来の地名から馬の飼育にまつわるものであったという。当時は官地であったが、大正時代に水戸市大足の二所神社に払い下げられ、後に氏子等の民地として開墾され畑地となった。その後転売され、再び昭和30年代に牧草地となったり、斜面は平垣にして植林されたという。

このような環境から、遺跡の所在の確認を実施することとした。

第２節　調査に至る経緯

平成17年12月８日、海老原係長と共に大縄林業原木株式会社を訪問した。大縄氏と太平企画設計工務所　塙氏から開発計画をもとに現況説明を受けた。詳細な計画図によると、既設工場や新設工場等のまわりにアスファルトの構内道路を設け、その他保管場所、原木積込、製品置場等のエリアがあって、平坦な土地を造成するものであった。

現況を見ると、既設工場の東から北東約100mほどは、土地のレベルが28.90mから25.75mと低く、平坦な敷地にするためには、開発計画地の約半分を占める北から西にかけて昇る緩斜面を切土して、既設工場周辺に盛土する計画であった。

遺跡台帳に記載された駒切遺跡は緩斜面は含まれていないが、埋蔵された文化財という性格上大まかな範囲を記載したもので、その周辺であれば試掘によって遺跡の有無の確認が必要であることを説明したところ、快く理解が得られた。

平成18年１月10日、再度現地踏査をした。地形の高い切土部分の旧牧草地と開発地外の上にあたる畑地（標高35m～36mほど）に縄文土器片や石器片の遺物散布が見られ、切土地内のうち標高31mほどを境にその下方からは遺物の散布は見られなかった。

このことから駒切遺跡の中心は、この緩斜面の上部にあると予想された。そこで、大縄・塙両氏立会のもとに標高30mから上と建物設置部分、その周辺にトレンチを設定した。

西より撮影（Ｂ区～Ｃ区）

第３節　調 査 の 実 施

○　調査方法

・法面切りユンボー（幅1.5m）によるトレンチ法による調査。

・確認にあたっては、ローム層の遺構確認面までの深さ、出土品の有無、遺構と考えられる落込、地層、土色等を観察する。

・遺構保存のため、トレンチ内の遺構確認状況によってトレンチ設置場所を選定する。

・東から西へ走る農道を境に、調査区を北側がＡ区、南側をＢ区とする。

○　調査の実施　　平成18年１月11日（水）～13日（金）

海老原係長、調査補助員５名で実施。調査状況を事業者に説明しながら進めた。なお、12日には、市役所環境課長谷川主幹及び生涯学習課中野課長補佐の来訪があった。13日に補足調査とトレンチの埋め戻し、遺物等の整理をした。

第4節　調査結果と考察

トレンチ名 幅1.5m (長さ m)		確認面の深さ (cm)	出土品の有無（数）	遺構（数）	所見等
(ATトレンチ) AT	At－1 (2.5)	(80～85)	縄文土器片多量の出土 浅鉢1個分出土	住居跡(1)	標高32.65の最高の地点にあたり、縄文片の出土が多いことから、当初はAt－1～At－5と分断してトレンチを設定した。
	At－2 (5.5)	(55～65)	縄文土器片多量の出土 鉢1個分出土	住居跡(1)	At－1とAt－2は、形態は不明であるが、住居跡の中心部分か土坑と考えられる。
AT	At－3 (5)	(65～75)	縄文土器片多量の出土 木炭出土	住居跡(1)	方形の住居跡で、木炭が出土していることから、縄文期以降の遺構とも考えられる。
	At－4 (7)	(40～47)	縄文土器片多量の出土	円形落込み 3ヶ所 住居跡(3)	縄文時代の円形の住居跡と考えられる。
	At－5 (4)	(60)	数点	無	本トレンチから下のトレンチは、ローム層まで深いが、出土遺物は1点も出土しないことから、遺構は所在しない。

ＥＴ全掘状況

ＢＴの調査状況

トレンチ名 幅1.5m (長さ m)	確認面の深さ (cm)	出土品の有無（数）	遺構 （数）	所見等
AT (74)	Atから判断できることは、予想したように緩斜面の高い部分に遺構が所在すると思われる。 Ａ区の遺跡は、外周トレンチによって、その広がりを推定することとした。 なお、遺物が多く出土しているのは、耕作等によって遺跡の上層部分が、かなりかく乱されていることも考えられる。			
DT (55)	(30～55)	縄文土器片	方形住居跡 (3) 円形住居跡 (2) 土坑状遺構 (3) 溝 (1)	開発計画では緑地帯であるが、Ａ区の遺跡の範囲を押えるため設定したトレンチである。 出土遺物はATのように出土しないが、耕作が深くまで進んでいないので、保存状況は良好とも考えられる。
ET (65)	(30～70)	縄文土器深鉢 (2)、鉢 (1) 石器片や石の塊 (1) 縄文土器片	溝 (1) 円形住居跡 (2) 土坑 (1) 集石遺構 (1)	Ａ区の東側の範囲を押えるためＢ区のBTの延長として設定したトレンチである。 遺構はトレンチ西側に見られることと、ATのAt－5から下方に遺物・遺構の出土がないことから、このトレンチの東端(注1)に遺構があると考えられる。
Ａ区	Ａ区に縄文時代の遺跡が所在すると判断できた。範囲は、Ａ区・Ｂ区とした農道を挟んでETから西の緩斜面で、平地林までの約4,500㎡ほどであると考えられる。(図「駒切遺跡の保存図」)			

ＥＴ深鉢出土状況

ＤＴ全掘状況

トレンチ名 幅1.5m （長さ m）	確認面の深さ （cm）	出土品の有無（数）	遺構 （数）	所見等
BT (55)	(20～50)	数点	無	B区東側、標高31mから30mに遺構は所在しないと判断できる。
CT (54)	(23～50)	縄文土器片 数点	方形住居跡（1） 土坑（1）	B区西側、標高33mの北側（農道近く）に遺構があることから、A区からの広がりが予想される。 BT、CTともに南の市道側に向かってローム層までの深さが浅く、地形は緩斜面の低部にあたると考えられる。
FT (29)	(40～55)	縄文土器片 数点	溝（1）	B区の状況を把握するため、BTとCTを結ぶ中央部分にトレンチを設定した。 方形落込みを精査すると、農耕による溝で遺構とは判断できない。
B区	標高は高いが市道側が低い地形で、遺跡はA区の北西側（CT）の一部に所在すると考えられる。したがって、B区の大部分には、遺跡は所在しないと判断できる。			
総合所見	・駒切遺跡は、この調査によって開発予定地の北から西にかけての緩斜面の上方に所在し、更に標高の高くなる隣接する牧草畑に広がると考えられる。なお、開発地内の遺跡は約4,500㎡と推測される。 ・この遺跡は、加曽利E式及び阿玉台を主体とする出土遺物から縄文時代中期で、今から約5,000年前の遺跡である。市内では、筑波大学が学術調査された笠間市片庭字西田の寺平遺跡（西田遺跡）に比定される貴重な遺跡である。 ・ここは長年牧草地として耕作され、数箇所にサイロも建てられていた。また、高圧電線の鉄塔が以前は遺跡の下に建てられ、これらの施設の地下はかく乱していると推定される。ATの状況を見ると、トレンチの掘削を躊躇するほど多量の縄文土器片が出土し、遺跡の一部は損傷があると思われるが、深部に完形に近い土器がAt－1・2やETから出土しているので、遺構は保存されていると思われ、埋蔵文化財として現状保存の価値は高い。			

B地区　トレンチ全掘状況

第５節　埋蔵文化財の取扱いについての協議

確認調査報告書をもとに、遺跡は縄文時代中期の遺跡で、その範囲はＡ区のＥトレンチ付近から標高の高くなる斜面上部で、Ｂ区の一部も含まれ開発予定地内の約4,500㎡が推測されることを説明した。そして、その保存方法について協議した。保存については、開発計画上遺跡に支障を及ぼす場合は、計画変更され、現状保存されるよう要望した。会社側は、土地購入、開発計画の変更、更に発掘調査経費の負担等財務的な課題と工事スケジュール等から社内で検討することで結論は持ち越しとなった。

再度の協議で、次のような提示があった。

① 当社の事業は、自然環境の一つとして天然森林を後世に引き継ぐ責務があると考え、有資源の一部である廃木材を再砂原料として社会に送る木材リサイクル工場であることから、遺跡も自然と一体化しているものと考えているので、遺跡の重要性は理解できる。

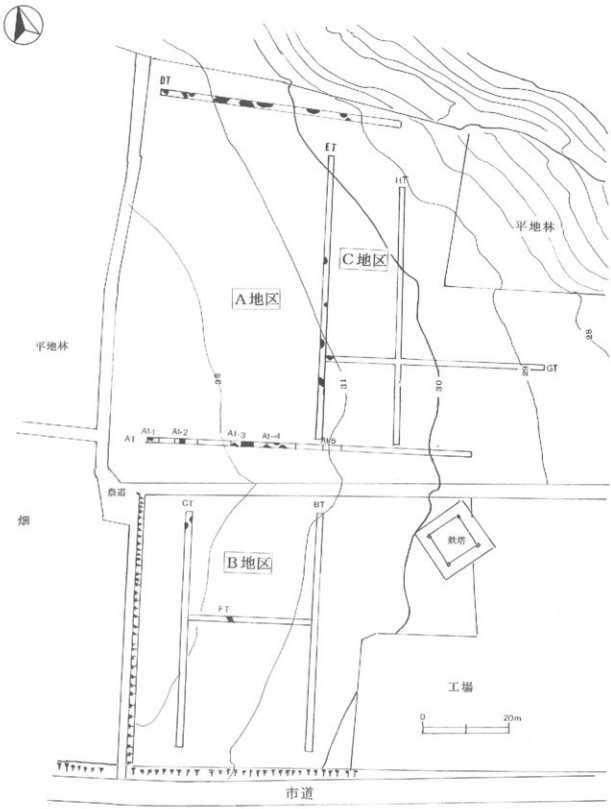
② 当社の理念の具現化として、この遺跡を利用して、この工場敷地内には縄文時代の遺跡があり、それを現状保存して緑地化しておくことは意義があると考えられる。

③ ただ、工場としては機能上、幅８ｍの構内道路だけは造成したい。もし、そこが遺跡にかかればその部分だけは記録保存のため発掘調査されたい。そして、できれば出土遺物を社内にコーナーを設け、展示して工場見学者や一般の方々に公開し、文化財の普及に役立てたい。

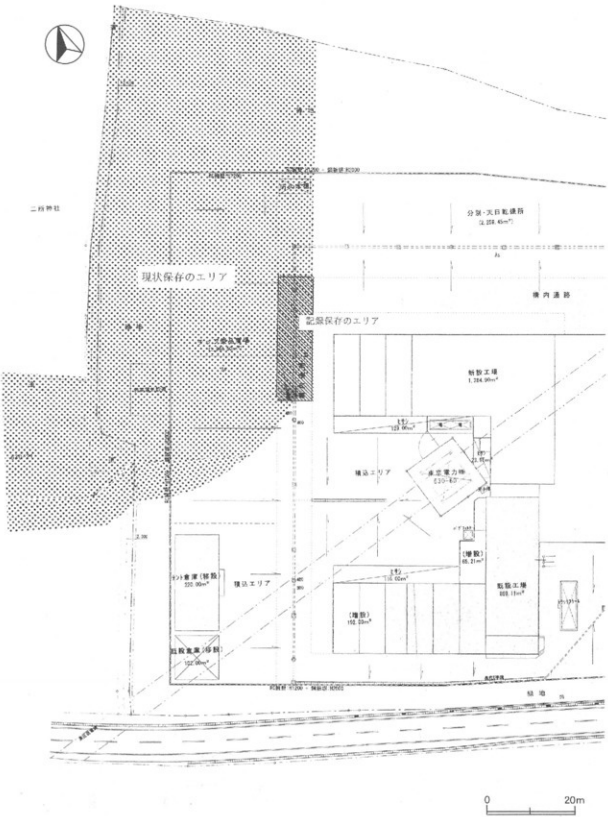
教育委員会では、この崇高な理念と文化財尊重の心構えを受け入れることとし、最小限の面積約300㎡を調査してその中から遺跡の性格等を把握することを前提に、県教育庁文化課に発掘届を提出した。文化課は、Ｅトレンチの下方の切土部分をＣ区とし、Ｇトレンチ、Ｈトレンチを入れ、発掘調査と平行して実施するような指導があり、調査面積1,500㎡として受理された。教育委員会は、工事スケジュールに合せて早急に駒切遺跡調査会を設立し、調査の実施に踏み切った。

まず、調査区域の表土剥ぎと平行して、Ｃ区にトレンチを入れたがその結果、Ｅトレンチの近くに方形落込みが確認された以外は、Ｇトレンチにも遺物、遺構もなく、予想したようにＥトレンチ上の緩斜面に遺跡が所在することが再確認でき、当初の計画通り調査を進行していった。

遺跡の中心（Ａ地区）の状況　（Ｃ地区東より撮影）


DT
ET
HT
平地林
C地区
A地区
平地林
35
GT
31
30
38
AT
At-1
At-2
At-3
At-4
AN9
農道
畑
CT
BT
鉄塔
B地区
FT
工場
0
20m
市道

トレンチ設定図



駒切遺跡の保存図

第２章　発掘調査の経過

３月10日（金）晴

- 設営作業（休憩所設置、用具の搬入）
- 調査区設定、ＧＴ、ＨＴ掘削地の確定
- 調査方法の検討

設 営 作 業

３月11日（土）晴

- 大淵良夫氏と主任調査員による地鎮と安全祈願
- 調査方法と執務等の説明と協力依頼
- 調査区の表土除去、落込みの検出
- ＧＴ、ＨＴ設定と極削による遺物、遺構の確認

教育委員会　海老原係長

調査地の表土除去

３月12日（日）晴

- ＧＴでＦＴの接点に方形落込み確認
- 一部調査区を拡張する
- ＨＴには出土遺物、落込み検出されない
- ＨＴ北側ほどローム層まで20cm～10cmと浅い
- ＧＴに鉄塔跡の撹乱、地層を確認する
- ２号住居跡掘込み開始

鯉渕和彦氏の指導

第２号住居跡の確認

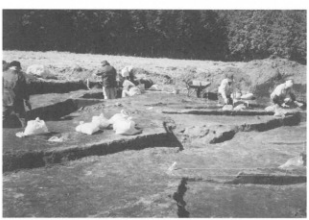
３月13日（月）晴

- ２号住居跡から土師器片出土。壁面、床ともに浅い竈を東側に検出。
- 各落込みにベルトを設定する。
- ２号住居跡周辺落込みの掘込み開始
- 溝跡の掘込み開始

荻原義照指導員の指導

第２号住居跡の発掘開始

第１号･第２号住居跡の発掘



溝跡Ａ～Ｃ地点土層セクション測量

笠間史談会の現地説明会

池野辺歴史を語る会の現地説明会

３月14日(火)晴

- 測量担当による調査区と遺構の全体測量
- 土坑か住居跡か明確ではなかったが、１号住居跡と判断。多くの縄文土器片から東側壁面を失った縄文中期の第１号住居跡とした。
- ２号住居跡床面精査と柱穴を探るが明確さを欠く。
- ２号住居跡より土師器片出土し、炉跡と東電から古墳時代の遺構と判断できる。
- 溝跡のＢ地点土層セクション測量。

来訪者　柴沼池野辺公民館長

３月15日(水)晴

- ２号住居跡ベルトセクション実測。柱穴は確認できなかった。
- ２号住居跡　竈四分割を始める。
- １号住居跡の発掘と精査
- 溝Ａ・Ｂ・Ｃ地点土層セクション測量

来訪者　教育委員会　保坂次長　中田生涯学習課長　海老原係長

３月16日(木)曇

- ２号住居跡　ベルト撤去、住居跡測量
- １号住居跡　ベルトセクション
- 仮称３号住居跡は、住居としての形が確認できず、住居跡でないと判断する。
- １号土坑より縄文土器（復元可能）出土。
- 各土坑　ベルトセクション実測。

来訪者　笠間史談会27名

３月18日(金)晴

- 溝跡を完掘　縄文土器片多く、僅かに土師器、須恵器出土するが、流れ込みで時期の決め手なく不明。
- 溝跡測量と写真撮影する。
- ２号住居跡　竈分割測量
- ２号土坑から縄文浅鉢（完形）出土

来訪者　池野辺歴史を語る会15名

3月19日(日)曇のち晴

- 1・2・3・4土坑完掘、測量
- 1号土坑から磨製石斧出土
- 1号住居跡遺物のエレベーション実測
- 2号住居跡竈完掘。炉跡を含めて実測
- 5号土坑大型はフラスコ状土坑を確認する。

来訪者　地元民6名

教育委員会　海老原係長外3名

土坑群の発掘

3月20日(月)晴

- 1号住居跡　床面検出柱穴不明　ほぼ完掘
- 5号土坑の掘込みを重点的に進め、ほぼ完掘
- 5号土坑の底部から縄文土器深鉢2個（復元可能）出土

来訪者　教育委員会　岡井生涯学習課長

5号土坑(フラスコ形)の発掘

3月22日(水)晴のち曇

- 5号土坑の実測
- 調査地完掘状況の写真撮影
- 現場での測査は完了する。
- 出土遺物の洗浄（大橋公民館）
- 設営場所の撤去と用具等の片付けと搬出

来訪者　教育委員会　海老原係長外1名

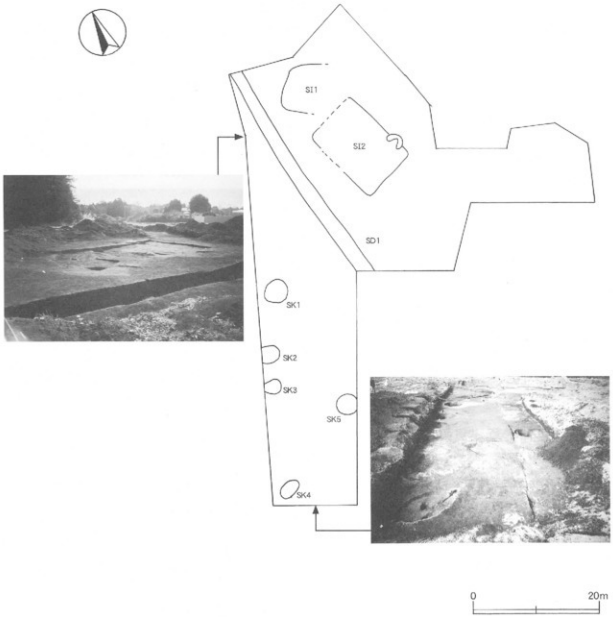
5号土坑の測量

3月23日(木)曇のち晴

- 文化課　飯島文化財保護主事の現地指導。調査完了が認められる。
- 出土遺物の洗浄。
- 遺物、用具等を歴史民俗資料館へ搬入。
- 大縄林業原木株式会社へ現場発掘完了を報告。

県教育庁文化課による現地指導

駒切遺跡調査全体図



整　理　作　業　　３月25日～４月15日

第3章　調査の成果

第1節　遺跡の概要

駒切遺跡は、今回の調査によって、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡であることが判明した。遺構としては、竪穴住居跡２軒（縄文時代１、古墳時代１）、溝跡１条、土坑５基が確認された。主な遺物としては、縄文土器（深鉢・浅鉢）、石器・石製品（磨製石斧・凹石）、土師器（坏・椀・甕）、須恵器（甕・蓋）などである。

第2節　遺構と遺物

1　縄文時代の遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡

第１号住居跡（第１図）

位置　調査区の北部に位置する。

規模と形状　南北軸2.2m、東西軸4.26mほどの長方形を呈する。主軸方向はN－54°－Eである。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は8～10cmである。

床　ほぼ平坦である。全体的に締まってはいるが、顕著な硬化面は認められなかった。

炉　検出されなかった。

ピット　検出されなかった。

覆土　６層に分層される。全体的に暗褐色土で、各層にローム粒子やロームブロックを含み、やや締りのある土層である。また、第１層から第３層にかけて土器が集中して出土していることから、土器の廃絶に伴う人為堆積と考えられる。

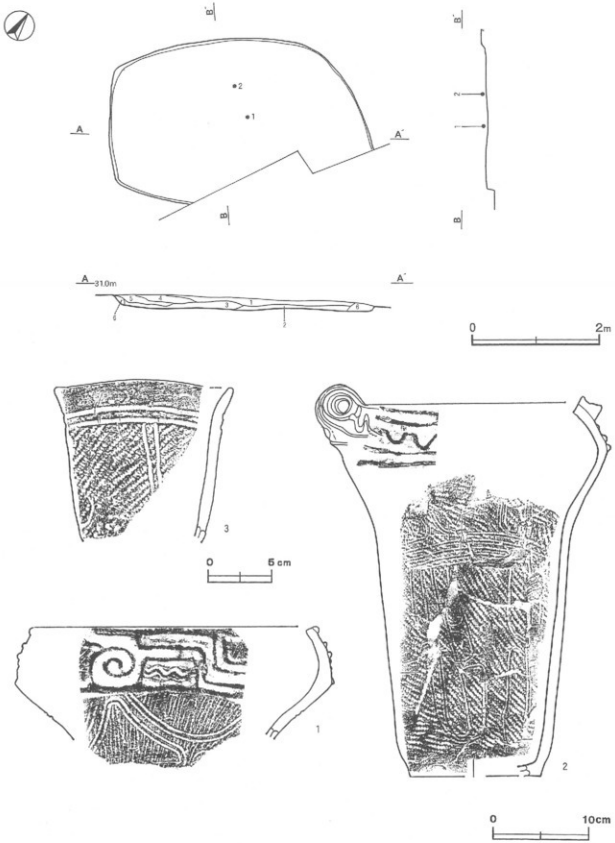
遺物出土状況　縄文土器片790点が出土している。上器片は中央部の覆土上層から下層にかけて散在する状況で出土している。１や３は下層から出土し、２は覆土下層と床面から出土した破片が接合したものである。時期決定の指標となる遺物である。

所見　時期は、出土遺物から中期後葉（加曽利Ｅⅰ式期）と考えられる。

Ｓｉ－１　土層解説
1　暗褐色　ローム粒子・小ブロック中量、焼土粒子微量、炭化粒子少量、粘性なし
2　暗褐色　ローム粒子・小ブロック少量、炭化粒子少量、粘性なし
3　暗褐色　ローム粒子中量・小ブロック少量、焼土粒子少量、炭化粒子中量、粘性なし
4　暗褐色　ローム粒子中量・小ブロック微量、炭化粒子中量、粘性なし
5　暗褐色　ローム粒子少量、焼土粒子微量、炭化粒子微量、粘性なし
6　褐　色　ローム粒子多量、粘性あり

第１号住居跡出土遺物観察表（第１図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	(29.0)	(11.7)	-	口縁部は緩度の平行沈線文、胴部には近の単節縄文を施文し、胴位の平行沈線文を施文。	長石・石英・雲母	普通	にぶい褐	覆土下層	
2	縄文土器	深鉢	35.2	40.8	(13.2)	沈線を有する隆帯区画による口縁部文様帯に沈線が巡り、区画内は隆帯によるクランク文と波状文、胴部以下の無節縄文を施文し、沈線を消すように横位の撫を施文。	長石・石英・赤色粒子	普通	にぶい褐	覆土下層～床面	
3	縄文土器	深鉢	(13.8)	(12.3)	-	口縁部に沈線を有する隆帯によって区画され、隆帯により波状文を施し、胴部には平行沈線文や波状沈線文を施文、以下の無節縄文を施文。	長石・石英	普通	にぶい褐	覆土下層	TP



第１図　第１号住居跡・出土遺物実測図

(2) 土坑

第１号土坑（第２・３図）

位置　調査区の中央部。

規模と形状　平面形が径1.8mの円形で、深さは44cmほどである。底面はほぼ平坦で、壁はやや内傾して立ち上がっており、本土坑が機能していた時期にはフラスコ状土坑であり、その下位が残存したものと考えられる。

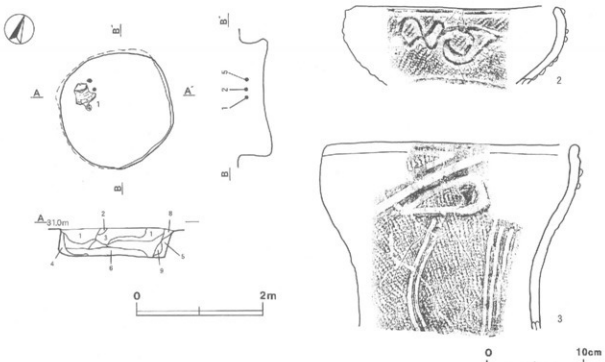
覆土　８層に分層される。全体的に暗褐色土で、各層にローム粒子やロームブロックを含む、やや締まった土層である。第４層には、土器が集中して出土していることなどから土器の廃絶に伴う人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　縄文土器片50点、磨製石斧１点、凹石１点が出土している。土器片は主にプラン中央部から出土している。１は覆土中層から逆位で出土している。２～５はいずれも覆土からの出土である。

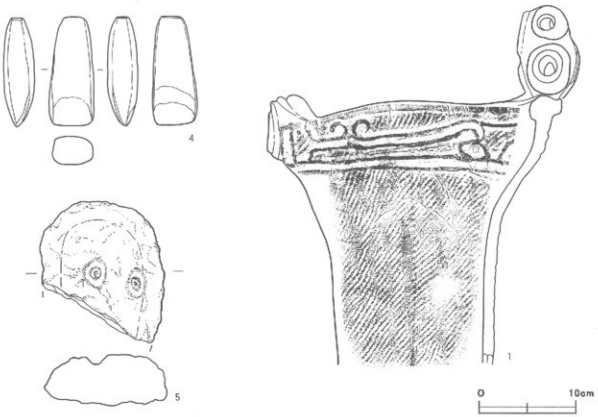
所見　時期は、出土土器から中期後葉（加曽利ＥⅠ式期）と考えられる。

ＳＫ－１　土層解説

1　暗 褐 色　ローム粒子中量・小ブロック多量、焼土粒子微量、炭化粒子少量、粘性なし
2　暗 褐 色　ローム小ブロック中量、炭化粒子微量、粘性なし
3　暗 褐 色　ローム粒子中量・小ブロック多量、焼土粒子少量、炭化粒子中量、粘性なし
4　暗 褐 色　ローム粒子・小ブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子中量、粘性あり
5　褐　　色　ローム粒子多量、炭化粒子微量、粘性あり
6　暗 褐 色　ローム粒子中量・小ブロック少量、炭化粒子少量、粘性なし
7　黒 褐 色　ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子小量、粘性なし
8　暗 褐 色　ローム粒子・小ブロック中量、炭化粒子微量、粘性あり



第２図　第１号土坑・出土遺物実測図



第３図　第１号土坑出土遺物実測図

第１号土坑出土遺物観察表（第２・３図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	24.0	(37.0)	－	口縁部に隆帯により１単位の橋状把手を作出。１単位の横ＳＳ状文を施付し、隆帯により文様を区画。区画内と単位ＳＳ状の単節撚文を地文とする。	長石・石英・砂粒・金雲母	普通	にぶい赤褐	掘上上部～中層	
2	縄文土器	浅鉢	(20.7)	(8.2)	－	沈線を介する隆帯区画によるＳＳ沈文様帯に沿って沿う。区画文内は、単節縄文を地文とし隆帯による撚糸文を施文。	砂粒・金雲母	普通	明赤褐	掘上中層	
3	縄文土器	深鉢	25.8	(19.8)	－	沈線が沿う隆帯で区画文を把出。区画内や単節ＳＳＬＲの単節撚文を地文とする。胴部には縦位の平行沈線文を施文。	長石・石英・砂粒・金雲母	普通	橙	覆土	

番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ	幅	厚さ	重量				
4	磨製石斧	11.3	4.6	3.2	258	砂岩	定角式	覆土	Q
5	凹石	(14.6)	12.7	5.3	974	凝	表面2面。	覆土	Q

第２号土坑（第４図）

位置　調査区の中央部。

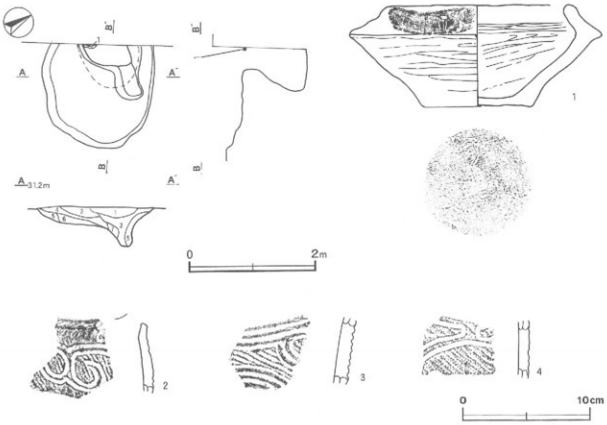
規模と形状　北西部は調査区外に及んでいる。確認された開口部の平面形は南北軸1.8m、東西軸1.8mで、楕円形と推定されるフラスコ状土坑である。底面はほぼ平坦で、平面形は南北軸0.5m、東西軸0.6mである。深さは120cmほどで、壁は下位から括れ部にかけて内傾し、上位は外傾して立ち上がっている。また、底面から括れ部までの高さは100cmほどである。

覆土　６層に分層される。全体的に暗褐色土で、ローム粒子やロームブロックを含む、やや締まりのある土層であり、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

遺物出土状況　縄文土器片120点が出土している。1は、完形品で覆土中層から正斜位で出土している。その他、2～4はいずれも覆土中からである。

所見　時期は、出土土器から中期中葉（阿玉台Ⅳ式期）と考えられる。

SK－2　土層解説
1　暗褐色　ローム小ブロック・中ブロック少量、焼土小ブロック微量、炭化粒子少量、粘性なし
2　暗褐色　ローム粒子中量・小ブロック少量、炭化粒子少量、粘性なし
3　暗褐色　ローム小ブロック中量・中ブロック少量、焼土ブロック微量、炭化粒子中量、粘性あり
4　暗褐色　ローム粒子中量、炭化粒子少量、粘性あり
5　暗褐色　ローム粒子多量、炭化粒子微量、粘性なし
6　暗褐色　ローム粒子中量、炭化粒子微量、粘性なし



第４図　第２号土坑・出土遺物実測図

第２号土坑出土遺物観察表（第４図）

番号	器種	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	浅鉢	14.4	8.6	8.7	口縁部は隆帯による4単位の楕円形区画文を形成し、隆帯に沿って細沈線文を施す。区画内は縦位の短沈線文を施している。胴部無文	長石・石英・砂粒・金雲母	普通	橙	覆土	底部縄代底
2	縄文土器	深鉢	－	(5.5)	－	沈線が縦方隆線により区画文、LRの羽節縄文を施文する。	砂粒・黒雲母	普通	黒褐	覆土	TP
3	縄文土器	深鉢	－	(6.2)	－	沈線が縦方隆線による区画文。連文は縦の羽節縄文。	長石・石英・砂粒	普通	橙	覆土	TP
4	縄文土器	深鉢	－	(4.7)	－	沈線が縦方隆線により文様を描出。区画内はLRの単節縄文を施文する。	砂粒・黒雲母	普通	にぶい褐	覆土	TP

第３号土坑（第５図）

位置　調査区の中央部。

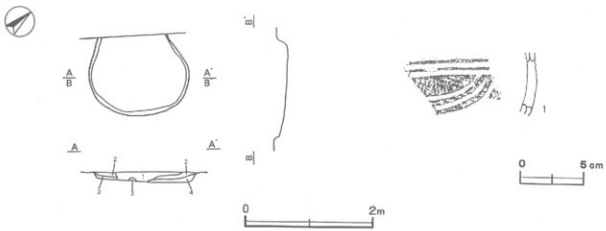
規模と形状　北西部が調査区外に及んでいるため、明確ではないが残存する形状から楕円形と推定される。確認された平面形は南北軸1.27m、東西軸1.6mであり、深さは20cmほどである。底面はほぼ平坦で、壁はやや外傾して立ち上がる。

覆土　４層に分層される。全体的に暗褐色で、ローム粒子や炭化粒子を含む。第２～４層は自然堆積だが、第１層は人為堆積である。

遺物出土状況　縄文土器片20点が出土している。土器片は、覆土上層から床面にかけて散在している。

所見　時期は出土土器から中期後葉（加曽利ＥⅠ式期）と考えられる。

ＳＫ－３　土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量、焼土粒子微量、炭化粒子少量、粘性なし
2　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子少量、粘性なし
3　暗褐色　ローム粒子多量、焼土粒子微量、炭化粒子中量、粘性あり
4　暗褐色　ローム粒子中量、焼土粒子微量、炭化粒子少量、粘性あり



第５図　第３号土坑・出土遺物実測図

第３号土坑出土遺物観察表（第５図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	沃鱗が伴う横帯により文様を描出。	砂粒・雲母	普通	明赤褐	覆　土	TP

第４号土坑（第６図）

位置　調査区の南部。

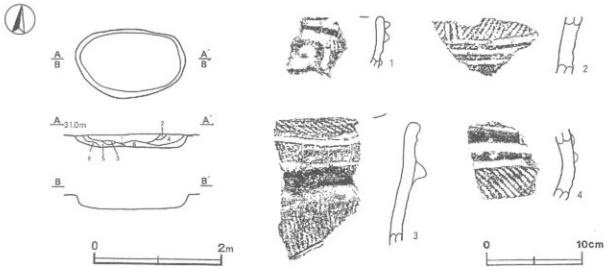
規模と形状　平面形は長径1.75m、短径1.1mほどの楕円形で、深さは12～15cmほどである。底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がる。

覆土　６層に分層される。全体的に暗褐色土で、ロームや炭化粒子、焼土粒子を含む土層である。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

遺物出土状況　縄文土器片21点が出土している。抽出・図示した遺物はいずれも覆土中からである。

所見　時期は、出土土器から中期後葉（加曽利ＥⅠ式期）と考えられる。

SK－4　土層解説
1　暗 褐 色　ローム粒子少量、焼土粒子微量、粘性なし　2　暗 褐 色　ローム粒子微量、粘性なし
3　褐　　色　ローム粒子多量、炭化粒子微量、粘性なし　4　褐　　色　ローム粒子多量、炭化粒子微量、粘性あり
5　暗 褐 色　ローム粒子中量、炭化粒子少量、粘性なし　6　褐　　色　ローム粒子多量、焼土粒子少量、粘性なし



第６図　第４号土坑・・出土遺物実測図

第４号土坑出土遺物観察表（第６図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	－	(4.0)	－	口唇部直下に隆帯を巡らす。区画内に隆帯による渦巻文を施文。	繊維	普通	橙	覆土	TP
2	縄文土器	深鉢	－	(4.8)	－	胴部に平行沈線文を施文。頸部に縦位の平行沈線文を施し、其の単位縄文を施文とする。	繊維	普通	橙	覆土	TP
3	縄文土器	深鉢	－	(9.2)	－	口唇部直下に沈線を巡らす。口縁部に1条の沈線が巡り隆帯が巡る。地文はLRの単節縄文。	長石・石英・砂粒・金雲母	普通	明赤褐	覆土	TP
4	縄文土器	深鉢	－	(5.5)	－	沈線が巡り隆帯による区画文。区画内はLRの単節縄文を地文とする。	長石・石英・砂粒・金雲母	普通	橙	覆土	TP

第５号土坑（第７図）

位置　調査区の南東部。

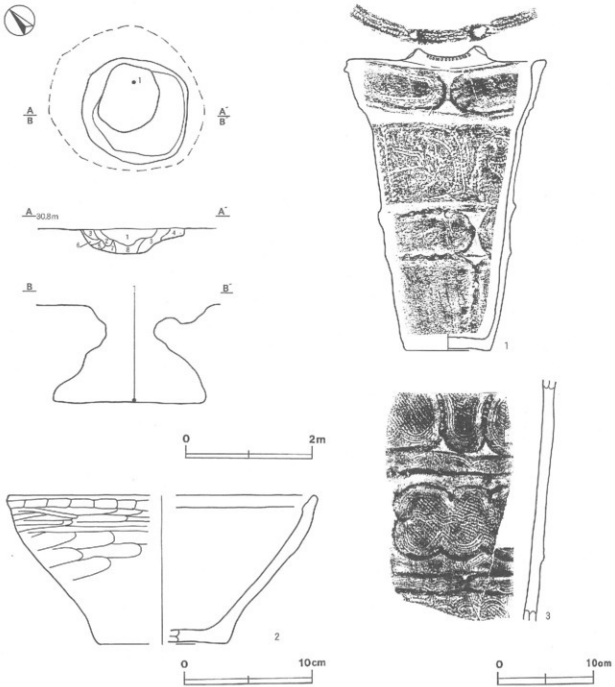
規模と形状　開口部の平面形が径1.6mほどの円形を呈するフラスコ状土坑である。底面はほぼ平坦で、平面形は長径2.3m、短径1.0mほどの楕円形を呈する。深さは150cmほどで、壁は下位から括れ部にかけて内傾し、上位は外傾して立ち上がっている。また、底面から括れ部までの高さは130cmほどである。

覆土　確認された土層は６層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

遺物出土状況　縄文土器片194点が出土している。土器片は、主に括れ部から下の覆土中から床面にかけて出土している。１は床面から逆位で、２は覆土上層から横位で出土している。３は覆土中からの出土である。

所見　時期は、出土土器から中期中葉（阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期）と考えられる。

SK－5　土層解説
1　黒 褐 色　ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、粘性あり
2　暗 褐 色　ローム粒子・小ブロック少量、焼土粒子微量、炭化粒子少量、粘性なし
3　暗 褐 色　ローム粒子・小ブロック少量、炭化粒子中量、粘性なし
4　暗 褐 色　ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量、粘性あり
5　褐　　色　ローム粒子多量、焼土粒子少量、粘性あり
6　暗 褐 色　ローム粒子中量、焼土粒子微量、炭化粒子中量、粘性なし



第７図　第５号土坑・・出土遺物実測図

第５号土坑出土遺物観察表（第７図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	20.5	31.5	9.0	口唇部に４単位の突起を有し、頸部沈線や隆帯により４単位の楕円形区画文、胴上部は縦位工具による菱面沈線により文様を描出、胴下部は隆帯による４単位の楕円形区画文、中間から沈線が沿うＶ字状隆帯文が垂下。	長石・石英・砂粒・黒雲母	普通	にぶい褐	床　面	底部網代痕
2	縄文土器	浅鉢	(24.0)	11.8	(9.6)	胴部無文。	長石・石英・雲母	普通	暗褐	覆土上層	
3	縄文土器	深鉢	—	(25.0)	—	胴部は隆帯区画文内に横位の沈線連弧文と波状沈線文を有し、頸の部位は無文を基文とする。	長石・石英・砂粒・金雲母	普通	暗褐	覆　土	TP。煤付着

2　古墳時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

第２号住居跡（第８・９図）

位置　調査区の北部に位置する。

規模と形状　約１／３がトレンチによって壊されているが、確認された平面形から南北軸5.1m、東西軸6.2mほどの長方形であると推定される。主軸方向はN―66°―Eである。壁は外傾して立ち上がり、壁高は10～15cmほどである。

床　ほぼ平坦で、よく踏み固まっている。中央部に焼土範囲がみられた。赤変硬化している部分があり、炉として使用されていた時期があると考えられる。

ピット　検出されなかった。

竈　北壁の東壁寄りに付設されている。規模は焚口から煙道部までの長100cm、袖部幅110cmで、壁外へ15cmほど掘り込んでいる。火床部は６cmほど床面を掘りくぼめている。火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道は外傾して立ち上がっている。

覆土　５層に分層される。全体的に暗褐色土で、各層にローム粒子や炭化粒子、焼土粒子を含んだ土層である。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

遺物出土状況　縄文土器片88点、土師器片24点（椀・坏・甕）、須恵器片１点（蓋）が出土している。１・２は竈付近の床面、４は南壁際の床面から出土している。３や須恵片は、表層から出土している。縄文土器片は覆土中から出土しており、流れ込みと考えられる。

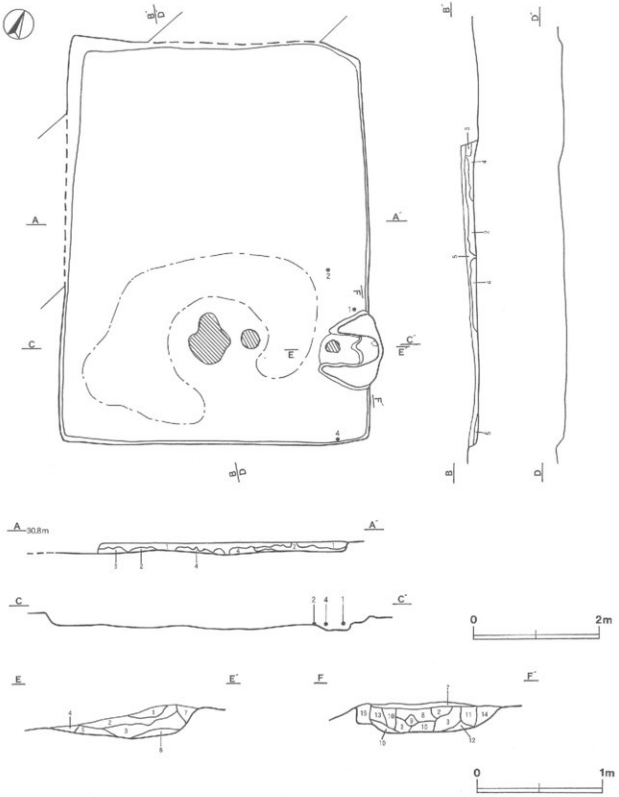
所見　時期は、出土土器から５世紀中葉～後葉であると考えられる。

ＳＩ－２　土層解説

1　暗褐色　ローム粒子・小ブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子中量、粘性なし
2　暗褐色　ローム粒子・小ブロック中量、炭化粒子中量、粘性あり
3　暗褐色　ローム粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子微量、粘性なし
4　暗褐色　ローム粒子多量、焼土粒子微量、炭化粒子中量、粘性なし
5　暗褐色　ローム粒子中量、炭化粒子中量、粘性あり

ＳＩ－２竈土層解説

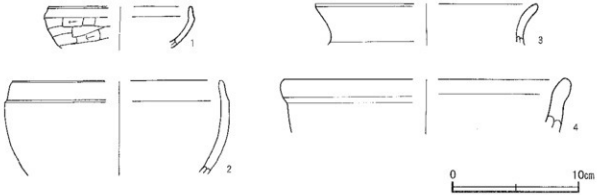
1　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量、粘性なし
2　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子中量、粘性なし
3　暗褐色　ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子中量、粘性なし
4　暗褐色　ローム粒子中量、炭化粒子少量、粘性なし
5　暗褐色　ローム粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子少量、粘性なし
6　褐　色　ローム粒子多量、炭化粒子中量、粘性なし
7　暗褐色　ローム粒子微量、粘性なし
8　暗赤褐色　ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子多量、粘性なし
9　暗赤褐色　ローム粒子中量、焼土粒子中量、炭化粒子少量、粘性なし
10　暗褐色　ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量、粘性なし
11　暗赤褐色　ローム粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子中量、粘性なし
12　暗褐色　ローム粒子少量、焼土粒子微量、炭化粒子中量、粘性なし
13　暗褐色　ローム粒子中量、焼土粒子中量、炭化粒子少量、粘性なし
14　暗褐色　ローム粒子中量、焼土粒子微量、炭化粒子中量、粘性なし
15　灰褐色　粘土粒子少量、焼土粒子少量、炭化粒子多量、粘性なし



第８図　第２号住居跡実測図

第２号住居跡出土遺物観察表（第９図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	手法の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
1	土師器	坏	(11.6)	(3.3)	—	体部外面ヘラ削り、内面ナデ	長石・石英	普通	にぶい黄橙	床　面	20%
2	土師器	甕	(16.8)	(7.5)	—	体部外面ナデ	長石・石英	普通	にぶい橙	床　面	15%
3	土師器	甕	(17.4)	(3.3)	—		長石・石英	普通	にぶい橙	床　面	5%
4	土師器	甕	(22.2)	(4.2)	—		長石・石英・雲母	普通	にぶい黄橙	床　面	5%



第９図　第２号住居跡出土遺物実測図

3　その他の遺構と遺物

(1)　第１号溝跡（第10図）

規模と形状　調査区の南部から北方向（N―０°）に直線的に延び、長さ18.6mが確認されている。規模は幅1.03m、下幅0.5～0.6m、深さ50cmである。断面形は逆台形状を呈している。

覆土　７層に分層される。全体的に黒褐色でブロック状のロームを含み、強く締まった土層ではあるが、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

遺物出土状況　縄文土器片403点、磨製石斧１点、須恵器片10点（甕）が出土している。抽出・図示した土器片はいずれも覆土中から出土している。

所見　覆土中からは、縄文土器片が出土しているが、形状や覆土の色調などから縄文時代の遺構とは考えにくく、かつその他に時期が特定できる遺物もないことから時期不明とした。直線的に延びる形状から区画溝の性格を有していた可能性が考えられる。

ＳＤ－１　土層解説

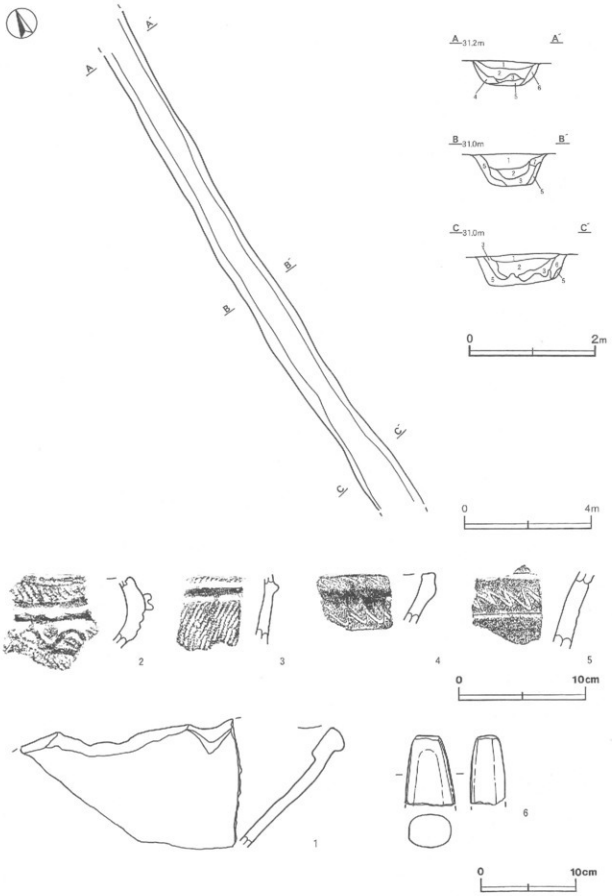
1　黒褐色　ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量、粘性なし
2　暗褐色　ローム粒子中量・中ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量、粘性なし
3　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子中量、粘性なし
4　暗褐色　ローム粒子中量、粘性なし
5　褐　色　ローム粒子多量、炭化粒子微量、粘性あり
6　明　色　ローム粒子多量、炭化粒子微量、粘性なし
7　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子少量、粘性なし

第１号溝跡出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	－	(12.3)	－	口縁部内側に稜をもち、口縁部下端には隆帯が巡る。無文	長石・石英・雲母	普通	灰褐	覆土上層	TP
2	縄文土器	深鉢	－	(5.6)	－	口縁部は沈線を有する隆帯により区画、区画内には波状沈線を施出し、上の段に縄文を施文とする。	長石・石英	普通	にぶい橙	覆土	TP
3	縄文土器	深鉢	－	(5.4)	－	横位の沈線が巡り隆帯を巡らす。地文は RL の単節縄文	長石・石英	普通	にぶい橙	覆土	TP

番号	種別	器種	口径	器高	底径	手法の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
4	須恵器	甕	－	(6.1)	－	口縁部にヘラ描きの波状沈線文を施文。	長石・石英	良好	灰	覆土	TP
5	須恵器	甕	－	(3.9)	－	ヘラ描きの波状沈線文を施文。	長石・石英	良好	灰	覆土	TP

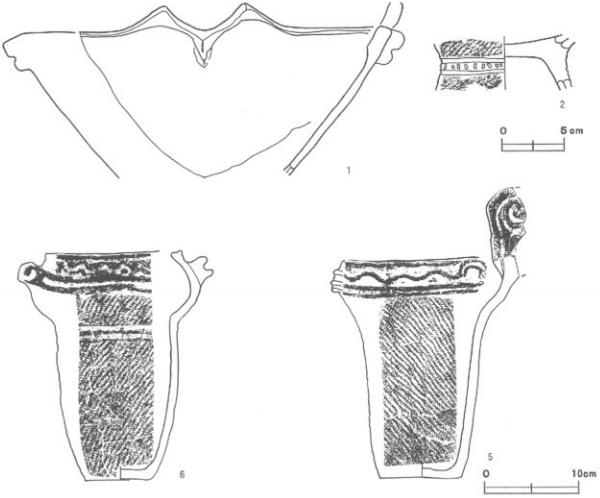
番号	器種	計測値				材質	特徴	出土位置	備考
		長さ	幅	厚さ	重量				
6	磨製石斧	(7.2)	5.1	3.5	198.0	砂岩	片刃式	覆土	9,刃部破損



第10図　第1号溝跡・出土遺物実測図

(2) 遺構外出土遺物（第11・12図）

表土等から出土した多量の遺構外出土遺物や試掘調査の際に出土した遺物のうち、完形または完形に近いもの及び特徴的なものを抽出して掲載する。なお、解説は遺物観察表で示した。



第11図　遺構外出土遺物実測図（1）

遺構外出土遺物観察表（第11図）

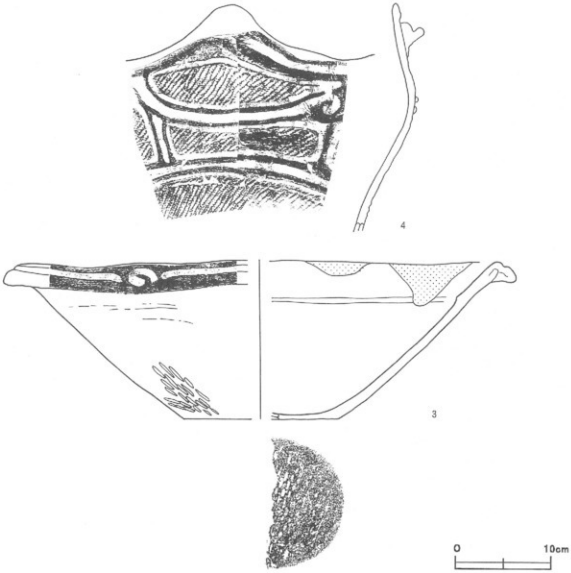
番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	浅鉢	[37.0]	(18.5)	(18.2)	口縁部下端に隆帯が巡る。無文。	長石・石英・雲母	普通	褐色	表土中	
2	縄文土器	器台	—	(4.4)	—	脚部工径に平行沈線が巡り、文様内に列点文が施されている。地文は縄の思考縄文。	長石・石英・砂粒	普通	橙	表土中	

Aトレンチ出土遺物観察表（第12図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
3	縄文土器	浅鉢	[50.0]	16.3	[16.0]	口縁部に沈線が巡り、渦巻文を施文。脚部無文。	長石・石英・砂粒・金雲母	普通	暗褐		一部線部に赤彩痕跡確認出来
4	縄文土器	深鉢	—	(21.0)	—	口縁部には沈線を巡らし、渦巻文を施文。口縁部には隆帯と沈線により楕円形区画文・渦巻文を施文している。区画内と脚部は 縄の単節縄文を地文としている。	長石・石英・砂粒・金雲母	普通	黒褐色		

Eトレンチ出土遺物観察表（第11図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
5	縄文土器	深鉢	14.2	24.3	7.3	隆帯による1単位の波状口縁以単手を作出。口縁部は隆帯区画文内に波状沈帯を施している。区画内や脚部は1Lの単節縄文を地文とする。	石英・砂粒	普通	橙		
6	縄文土器	深鉢	16.5	[30.3]	8.7	口縁部直下に波状沈線を施文。沈線を有する隆帯により渦巻文を作出。頸部に平行沈線を巡らしている。脚部は 縄の単節縄文を地文とする。	砂粒・黒粒子	普通	こぶい橙		



第12図　遺構外出土遺物実測図（2）

参考文献

- 吹野富美夫・宮崎修士・柴田博行「伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書4　前田村遺跡G・H・I区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第146集　1993年3月
- 川又清明・野田良直・吹野富美夫・浅野和久「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　宮後遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第188集　2002年3月
- 荒蒔克一郎「一般国道50号下館バイパス改築事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　堂貝遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第213集　2004年3月
- 和田清典・吹野富美夫・浅野和久・荒蒔克一郎・駒澤悦郎「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　宮後遺跡2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第240集　2005年3月

第3節　総　　括

調査は、遺跡保存の協議から工場構内道路内約300㎡であったが、表土除去を始めると遺構確認のローム層までの間に縄文土器片の出土が多かった。ここが昭和30年代から平成15年ごろまで牧草地で、その後は耕作放棄で雑草地となった。その間、外国製大型トラクターで耕耘が繰り返されていたためと考えられる。しかし、調査地より標高の高い緩斜面は、ローム層までの黒土層は深く、確認調査のAトレンチで出土した浅鉢とEトレンチの深鉢は、復元することができたこと等から、標高31mの調査地より上は遺構の保存状態は良いことが考えられる。

第1住居跡は、縄文土器片がまとまって出土していたことから、表土はかなり失われていた。したがって、壁の立ち上がりも浅く、しかも東側は失われていた。これは隣接する古墳時代の第2号住居跡とさらに、その間に柱穴らしき落込みがあることから、重複する遺構と、出土遺物からこの遺構は、縄文時代と古墳時代であることを示している。

縄文時代の時期は、住居跡と5基の土坑等から出土した遺物が、阿玉台Ⅲ、Ⅳ式、加曽利E Ⅰ式が主体で、縄文中期の貯蔵庫と思われるフラスコ状土坑が3基検出されていることも、この時期の特徴を示している。

第2号住居跡は、土師器片の出土と北東の竈の布設から古墳時代の住居跡と判断される。また、竈の前に炉跡も検出されることから、両者併用タイプの時期で、5世紀中葉の和泉期の住居跡と考えられる。

溝跡については、調査範囲内を直線に走り、U字の自然の掘込の形態である。出土品は、多くの縄文土器片と僅かな土師器、須恵器片で、遺物の出土状況から流れ込みと思われ、時期及び性格の決め手に欠いた。ただ、一部縄文時代の遺構を切って作られていることから、縄文期以降の構築であると考えられるが、その性格は不明であった。

総括的に見て、この遺跡は、縄文中期の遺跡であるが、日常生活に必要な石器類の出土が石斧と発火石の1点と少ないことから、フラスコ状の土坑をめぐらした中に、数軒の住居が点在する中期の特徴的な集落が予想される。そして、この遺跡の近くに大平古墳群や駒来古墳群、さらに以前に湮滅したという駒切古墳群もあったことから、後に古墳時代の人々が、この地に住居を構えるようになったことを示唆する遺跡でもあった。

この発掘調査は、池野辺地内では初めてのことで、この地区の人々の関心は高かった。遺跡台帳に未記載の遺跡が、居住地内に所在する等の情報提供があり、特に字平にある鹿島神社北側の畑地は、縄文土器片の散布地で、採集した縄文土器が東小学校に保管されていたり、民家に石斧や鉄さい等が収集されていた。また、字城の内にも灰釉短頸瓶型の蔵骨器2個と土師の坏片が保管されていて、未確認の遺跡が所在することが地域住民からの提供で知ることができ、今後改めて分布調査の必要性を痛感した。

僅かな発掘調査ではあったが、この調査が郷土の歴史解明の一端と、郷土愛の助成に役立つことにも意義を感じるとともに、3月とはいえ寒冷であった発掘現場、更に細片を拾い上げての根気のいる土器の復元と実測図の整理作業等、調査団の各位の協力と調査を支えた大鋼木材原木株式会社と調査会、更に適切なご指導をいただいた県教育庁文化課と指導委員に敬意と感謝を捧げまとめとする。

写　真　図　版

駒　切　遺　跡

SI 1-3

SI 1-2

SI 1-1

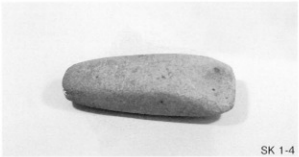
SK 1-2

SK 1-3

SK 1-1

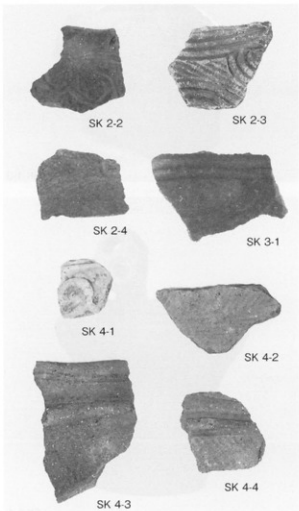
SK 1-1

PL 2



SK 1-4

SK 1-5



SK 2-2

SK 2-3

SK 2-4

SK 3-1

SK 4-1

SK 4-2

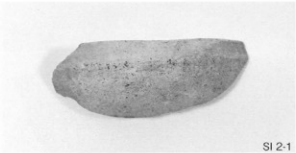
SK 4-3

SK 4-4

SK 2-1

SK 5-2

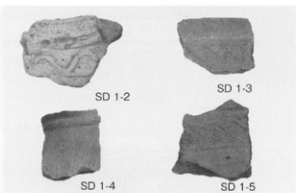
SK 5-1


SI 2-1

SI 2-2

SK 5-3

SI 2-3


SD 1-2
SD 1-3
SD 1-4
SD 1-5

SI 2-4

SD 1-6

SD 1-1

遺構外-2

遺構外-4

遺構外-1

遺構外-3

遺構外-5

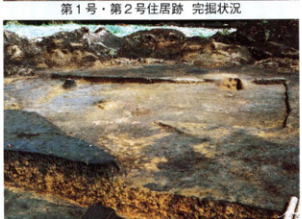
遺構外-6

第１号住居跡　縄文土器出土状況

第２号住居跡　完掘状況　竈と炉跡

第１号・第２号住居跡　完掘状況

第２号住居跡　竈完掘


第２号住居跡　完掘状況

溝跡完掘

第１号土坑　縄文土器出土状況

第２号土坑　縄文土器（完形）出土状況

第５号土坑の完掘状況

第５号土坑　縄文土器出土状況

池野辺地内出土の遺物

〈池野辺字平地内出土遺物〉

笠間市立東小学校保管

柴沼　真一氏所蔵

〈池野辺字城の内地内出土遺物〉

関　　和夫氏所蔵

報告書抄録

ふりがな	こまぎりいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	駒切遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	能島 清光　山口 憲一
編集機関	笠間市駒切遺跡発掘調査会
所在地	笠間市石井717
発行機関	笠間市駒切遺跡発掘調査会
発行年月日	平成18年5月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
駒切遺跡 (こまぎりいせき)	笠間市池野辺字駒切(かいけのべあざこまぎり)630外	08216	001	36度 23分 44秒	140度 20分 36秒	平成18年 3月10日 ～ 平成18年 4月16日	1,500㎡	工場拡張地内の構内道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	検出遺構		主な遺物	特記事項
駒切遺跡	集落	縄文時代	住居跡	1軒	縄文土器	完形（1）復元（5）
			溝跡	1条	石器	
			土坑	5基	土師・須恵器片	
		古墳時代	住居跡	1軒		

駒切遺跡

平成18年5月26日

発行　笠間市駒切遺跡発掘調査会
笠間市石井717番地
TEL　0296-77-1101

印刷　山三印刷株式会社
水戸市河和田町4433の33
TEL　029-252 8481